⑱ 豊臣秀吉の肖像画（昭和時代）

植中直斎「豊臣秀吉像」（昭和時代、元貞教小蔵）

教科書載る偉人、身近に

東山区の貞教小（現在は開睛小・中に統合）は1869（明治2）年、下京第29番組小学校として正面通塗師町角に開校し、最初は正面校と呼ばれました。近くには豊臣秀吉公を祭る豊国神社もあり、ゆかりの地に建てられた学校として、秀吉への尊敬の思いを強く持っていたといいます。

それをよく表しているのが1876（明治9）年に定められた貞教校の校章で、ヒョウタンとキリがデザインされたものです。ヒョウタンは秀吉の馬印、キリは家紋として使われたものでした。

また、校舎の建築には特注の軒丸瓦が作られ、そこには千成ヒョウタンが彫刻されました。1878（明治11）年には豊国神社再興のため社殿が建てられることになり、それに伴って鞘町通正面下に移転し、中国の『礼記』に由来する貞教小という校名になりました。

その後も学校では太閤秀吉をとても大事にしており、肖像の掛け軸などが所蔵品として今に伝わっています。写真は大正から昭和に活躍した画家の植中直斎が描いた作品で、陣羽織姿の秀吉を描いたものです。

明治期には、修身教育において豊臣秀吉の生き方が見直され、小学校で熱心に学ばれました。1882（明治15）年には宮内庁から勅撰（ちょくせん）修身書である『幼学綱要』が全国の学校に頒布されましたが、その中で秀吉は「敏智」「度量」を持った人物として紹介されています。その他、「立志」の人物としても有名でした。

開化の世の中においては自らの努力によって身を立てること、そのための立志の精神が重要視されました。イギリスのスマイルズの著で中村正直訳の『西国立志編』がベストセラーとなり、小学校で修身教科書として用いられたり、明治天皇の御前講義に用いられたりしました。そうした中、秀吉の立志伝が注目されていたのです。

貞教小の児童にとって、教科書にも載る偉人が身近に感じられることは、秀吉への尊敬をますます強くしたことでしょう。

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）